

環境教育センター活動報告

遠 藤 晃

【1】 地域と連携した環境教育の推進

(1) 都城市環境政策課との連携と「水辺環境調査研修」受講

都城市環境政策課からの協力依頼を受け、平成26年度より、同課が行う都城市内の小学校における水辺環境調査のサポートに学生が取り組んでいる。この事業は、宮崎県主催「身近な水環境に関する学習会実施要領（未来につなぐ水資源・水環境の保全推進啓発事業）」の一環として、県内のいくつかの小学校で実施されるものである。

5月13日（金）、宮崎県環境管理課が衛生環境研究所で実施した「水辺環境調査研修」を子ども教育学科4年生4名が受講した。また、これをふまえて都城市立南小学校、高崎麓小学校の水辺環境調査をサポートした。授業の内容の詳細については、下記の【2】小学校の環境教育サポートに記す。



(2) 綾町における親子向け森林環境教育プログラムを創作・提供・実施

3月6日（日）、一般社団法人「てるはの森の会」がユネスコエコパーク綾町で開催した「森のめぐみの工作&散策」において、「てるはの森の会」の要請を受け、子ども教育学科の学生有志が森林環境教育プログラム「薪すとーぶ」を創作、当日の提供・実施を担った。実施まで学生たちが定期的集まり、参加者の年齢や綾の照葉樹林にあわせたプログラムの創作及びアレンジに取り組んだ。

「活動の到達点」「導入の在り方」などについて活発な議論をしながら創作したプログラムを、当日は親子10組を対象に実施した。当日の活動の様子は3月8日の宮崎日日新聞に写真付きで掲載された。



【2】 小学校・幼稚園の環境教育サポート （小学校・幼稚園との連携）

(1) 都城市立有水小学校の環境教育をサポート

5月2日（月）、有水小学校4年生の総合的学習の時間において、子ども教育学科4年の学生が、環境教育の授業のサポートを行った。これは有水小学校から環境教育センターが依頼を受け、「環境教育演習」の講義のフィールドワークとして実施したものである。小学校における環境教育の指

導法について実践的に学ぶ場として設定したものであるが、このような実践的な体験の場は、学生にとって「アクティブ・ラーニング」的な授業における「ファシリテーター」としての教師の役割について学ぶ機会となっている。

この後、学生たちが定期的に有水小学校の環境教育の授業に関わる展開となり、その回数は4月19日～10月20日の間に11回、のべ32名の学生が参加した。学生たちは学校の授業をサポートすると同時に、総合的な学習の時間の指導法を実践的に学ぶことができ、小学校と本学の双方にとってプラスになる連携関係が確立されている。



(2) 宮崎県綾町と連携してユネスコスクール綾小学校の環境教育を学生がサポート

5月17日(火)、環境教育センターが宮崎県綾町と連携して環境教育を実施した。この活動は、綾小学校より依頼を受けた環境教育センターが、綾町役場のユネスコエコパーク推進室と連携して企画したもので、綾小学校4年生の総合的な学習の時間に実施した。この授業は、長年、宮崎県シェアリングネイチャー協会のメンバーが綾小学校で実施してきたネイチャーゲームの流れを受け、ESDの視点から新たに組み込んだもので、子どもたちの発見や観察が、課題解決型の学習へとつながるプロセスを重視している。今回は、小学校教諭を目指す人間発達学部の学生たちが、授業サポーターとして参加した。学生たちはアクティブ・ラーニングとカリキュラム・マネジメントで注目される「総合的な学習の時間」の意義と指導方法を、実際の現場で子どもたちや先生方と関わり

ながらリアルに学ぶことができた。当日の様子は、5月17日のMRTニュースで放映され、5月21日付宮崎日日新聞に掲載された。



(3) 都城市立南小学校、高崎麓小学校の環境教育サポート

7月8日(金)、南小学校の環境教育の授業を学生がボランティアスタッフとしてサポートした。これは都城市環境政策課の依頼を受けて、宮崎県主催の小学校向け出前授業「身近な水環境学習会」を、南九州大学の学生がボランティアスタッフとしてサポートしているもので、昨年度の安久小学校、有水小学校に続き3回目となる。当日はあいにくの豪雨のため、大淀川での調査から予定を変更して教室内での授業となった。当日はそれぞれ児童10名ずつほどのグループを担当し、水質調査や水生生物調査の指導を子どもたちに行った。

またその前日の7日(木)は高崎麓小学校での同様の環境学習を学生1名がサポートした。



(4) 丸野小学校の環境教育を学生がサポート

6月10日（金）、都城市立丸野小学校4年生の総合的な学習の時間に行われた校外探検活動を、子ども教育学科の学生3名がサポートした。丸野小学校では、総合的な学習で、近くの田畑や用水路の中の自然を題材とした主体的・協働的な課題探究学習に取り組んでおり、環境教育センターではその学習の当初より、校外活動などのサポートを行っている。この学習に小学校の教員志望の学生が参加することで、アクティブ・ラーニングの実践的な指導法を学ぶ、良い機会を与えていただいている。

(5) 園児たちのイモ掘り

(①学生主体の取り組み ②実施)

このイモ掘りは、人間発達学部と連携している幼稚園からの依頼を受けた環境教育センターが窓口となり、「環境教育論」を受講している子ども教育学科の学生が中心となって環境園芸学科の学生と打ち合わせを重ねながら計画を作成、学生主体で実施された。使用するイモ畑は、環境保全園芸学研究室（山口健一教授）から、農薬や化学肥料を使っていない安心・安全なイモ畑を提供していただいた。



①学生主体の取り組み：10月6日（木） 環境園芸の学生によるレクチャー

本学フィールドセンターに幼稚園児を迎えてのイモ掘り実施に先立ち、イモ畑を栽培・管理している環境園芸学科の学生から、当日参加する子ども教育学科の学生50名ほどが、イモに関するレクチャーを受けた。その後フィールドセンターへ移動し、当日使用する畑を確認しながらイモの掘り方の手ほどきを受けた。

このレクチャーを参考にして、イモ掘り当日まで学生たちが話し合いながら実施計画を練りあげていき、学部を超えて学生たちがコミュニケーションを取りつつ進めるプロジェクトとなった。



②実施：10月25日（火） イモ掘り当日

人間発達学部の連携園である天竜祝吉幼稚園の園児たちが、フィールドセンターでイモ掘りを体験した。当日の計画は、子ども教育学科3、4年生の『環境教育論』（遠藤担当）の受講者が中心となって立案したものである。当日の参加者は、116名の園児と園の先生方、子ども教育学科から保幼ピークの3年生及び環境教育論の受講者を併せて50名ほど、そして環境園芸学科の学生たちとフィールドセンターのスタッフであった。その総勢200名ほどが、フィールドセンターのイモ畑に入った様子は壮観であった。

とりわけ子どもたちの集中力には目をみはるものがあり、イモを掘りながら五感をフル回転させてあらゆることに気づき、表現していた。またその言動により、学生たちもあらゆる気づきを得ることになった。保幼ピークの学生たちは自然の中

での幼児との関わり方を、環境教育論の受講者は環境教育プログラムの実践方法を、イモ掘りを通し実感を持って学ぶことができ、今回のこのプロジェクトは、学生たちにとって大きな学びの場となったようである。

この取り組みをモチーフにして、「環境教育」「ESD」「アクティブ・ラーニング」「カリキュラム・マネジメント」などをキーワードにして学校教育を考える、当センター主催「第10回 環境教育講演会 M-cafe (エム・カフェ) 10」へとつなげた。



【3】 環境教育学習会Mini-cafe「学校教育とESD」の開催

これからの子どもたちには、社会の加速度的な変化の中でも、社会的・職業的に自立した人間として、伝統や文化に立脚し、高い志と意欲を持って、蓄積された知識を礎としながら、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断し、自ら問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められている。

今、このような能力・資質を育成するために、児童生徒が主体的・協働的に課題発見・解決に取り組むアクティブ・ラーニングの有効性が注目され、教育プログラムとしてのESD(持続可能な社会の担い手を育成する教育)が、学校教育でも取り組み始められている。学習指導要領の次期改訂でも、大学の教育改革でも重要性を増しているアクティブ・ラーニング。能力・資質を育成するための教育プログラムとしてのESD。教室で教師はどのようにアクティブ・ラーニングを展開すれば良いのだろうか？ ESDとアクティブ・ラーニングはどのような関係があるのだろうか？ Mini-

cafeでは、参加者とともに、これからの学校教育を考えていく。

(1) Mini-cafe 4「学校教育とESD」開催

8月10日(水)、南九州大学 都城キャンパス・環境教育センターにおいて、Mini-cafe 4「学校教育とESD」学習会を開催した。当日は宮崎キャンパスもテレビ会議システムでつなぎ、二会場あわせて20名の参加者が、「農」を通した主体的・協働的な学びについて、提供された話題をもとに考えた。

まず、川信修治教授(環境園芸学科)より、本学の「子ども教育学科の学生を対象とした農業実習」について紹介いただいた。収量や品質など生産性を高める技術の習得を目的とした環境園芸学科の農業実習とは異なり、子ども教育学科向けに到達目標を変える必要があったこと。また学生が自分たちで考え主体的に取り組むように、学生への働きかけ方を試行錯誤して行ったことや、実習を通して見られた学生の変化などが重要なポイントとなる話であった。

次に、「小学校の総合的学習における米作りの教育実践」について、市内の小学校より事例紹介がなされた。無農薬にするのか農薬を使うのか。生えてきた雑草対策をどうするのか。発生したジャンボタニシは駆除するのか残すのか。あらゆる問題が起こるたびに、調べた結果を元に話し合いをして決断し、実行していく子どもたちの様子と教師の働きかけが紹介された。

二つの話題提供の後、「農」とアクティブ・ラーニングについて、参加した幼稚園教諭、小学校教諭、大学教員、学生がそれぞれの観点から考えを出し合い、議論を深めた。



【4】 第10回環境教育講演会 M-cafe 10 in 綾 の開催

12月10日（土）、綾ふれあい館（宮崎県綾町）において、第10回環境教育講演会M-cafe 10「掘ったイモはどんなイモ？－園児たちの芋掘りから見えてくる地域の未来－」を開催した。

10回目を迎えた今回、初めて大学を飛び出し、人と自然が共生するユネスコエコパークの町「綾町」*で、園児たちのイモ掘りから見えてきた地域の未来と教育について考えた。

(*綾町と南九州大学は、包括的連携協定を結んでいる)



当日は、綾町や宮崎市、都城、高鍋から40名ほどの参加者での開催であった。

はじめに、本学環境園芸学部山口健一教授が「なぜ、環境保全型農業なのか」というテーマで講演。園児たちが大学にやってきた話から始まり、意外に知らないサツマイモのこと、現行の農業や園芸における環境上の問題点、生物多様性に配慮した持続可能な作物生産の可能性についてお話しいただいた。

次に、人間発達学部遠藤による「園児たちの芋掘りとESD」がテーマの講演。園児たちの芋掘りをESDの視点からみたときに、子どもたちにどのような場を提供すれば良いのか、について話題を提供した。

講演後のディスカッションでは、農業高校の教員を目指す本学環境園芸学科の学生、綾町で園芸や農業に取り組んでいる方々、幼稚園や小学校で活躍する本学子ども教育学科の卒業生、先生を目

指す子ども教育学科の学生たち、綾町役場でユネスコエコパークの推進に関わる方々、そして本学教員から、芋掘りを通してそれぞれの立場から見えた、子どもたち、そして地域の未来についてコメントをいただき、それをもとにディスカッションが続いた。

今回は、参加者それぞれが、それぞれの取り組みをESDの視点から再評価・再検討する貴重な時間となった。

M-cafeは、専門家の講演を一方的に聞く場所ではなく、いろいろな立場の方々がひとつのテーマに関して「対話」を通した双方向のやり取りをする中で、参加者それぞれのなかに何かが生まれる、そんな「創造の場」を、これからも提供していきたいと考えている。